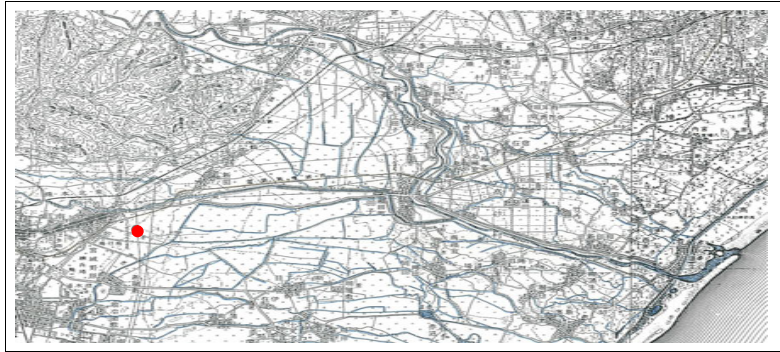


## みやぎのの地から学ぶ～自然災害の質<sup>たぎ</sup>を知って、備えて、強くなる！

昔のはなし

下の地図は、約90年前の宮城野区を含む地形図です。いまとの風景の違いを感じていただけますか？



- ・東北本線の開業がいまから129年前で、当時は仙台駅の次は岩切でした。なんとなく、原町や岩切（今市）付近のにぎやかさがしのばれます。
- ・東北本線ができる前には、木道が蒲生から仙台市内の東六番丁まであったそうです。馬車で、米や薪炭を運んでいたそうですが、なぜ、木道が敷設されたのでしょうか？
- ・七北田川の形状がかなり、いまと異なっています。改修もありましたが、川は生き物ということを実感するところでもあります。
- ・集落は結構、点在しているように見えますが、どんなところにあったのでしょうか。
- ・水路がたくさんあるのがわかります。そして網目状、格子状なのがわかります。なにか平野の中にも微高地に支配されているようにも見えます。

吹きわたす萩より萩にみだれつつ 風も色ある宮城野の原（本居宣長）

足元の地質はどうなっているの？

宮城野区は、どっしりとした蓋付き鉄瓶のような形をしています。広い面積で低地（平野）あり、頭部並びに北部に台地・丘陵がとりまいています。これらの地形は、足元の地質とも関係が深く、その形成に関わってきました。東部に広がる沖積平野は、七北田川や広瀬川が運んできた土砂によって形成されていて、下図に示したように微地形が確認されています。沖積層は約26000年前からと考えると、平均的には1.5mm/年の堆積が継続されてきたということになります。（仙台市史 特別編1(1996)より修正して転載）

下図は、七北田川に沿った地下の土層の断面図です。沖積陸成粘土層が内陸側で、暑さを増して、最内陸部では、沖積風成砂層も確認されています。また、地表面に近い陸成粘土層には、河床からの細粒～粗粒の砂層が薄く挟在しており、河川の影響が大きいことを示唆しています。以上のような地質の構成からすると、平

野部はきわめて新しい堆積物があり、広い意味での軟弱層で、地震、豪雨といった自然現象に対する抵抗力は大きくないことは明白です。また、台地や丘陵にしても、万全ということではなく、活断層が存在していたり、人工的に改変したところ特有の弱みを有しているということになります。

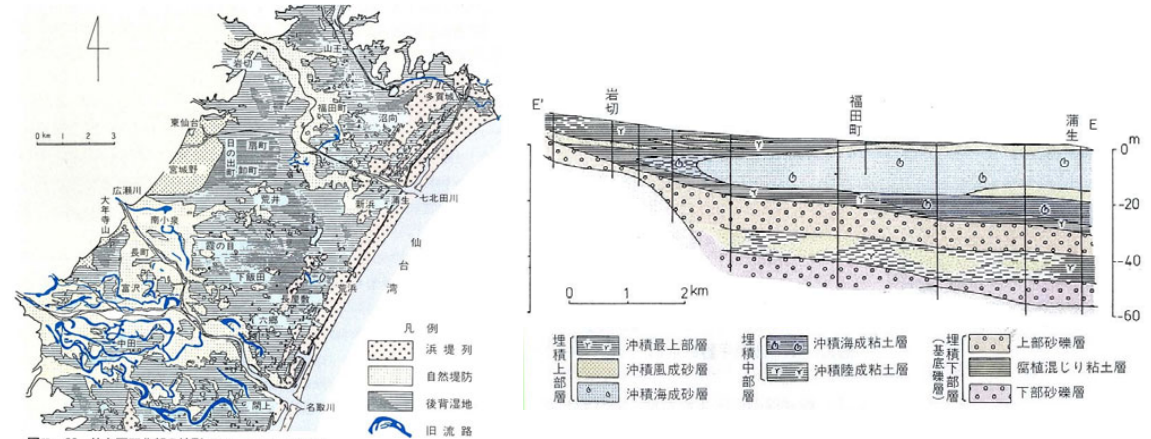


図11-26 仙台平野北部の地形（松本、1991を一部修正）  
低地北東部の海岸には現在仙台港が位置している

さまざまに心ぞとまる宮城野の 花のいろいろの虫のこえごえ（源 俊頼）

地名のいろいろ

人の暮らしが長いほど、地名にはその歴史が反映されていることが多いです。宮城野区内にもそれぞれ古くからの集落も多いですが、特に地形や地質をい表したものが少なくなく、いくつか、例を挙げてみたいと思います。

**福室**：もともとは水がたまる場所を示しているようです。地形的には**後背湿地**ということであり、全国的にも、“室”は“袋”にも通じ、類似の地形に使われています。

**田子**：もともとは、多湖(沼)ではないかと思われ、**湿地群**または**三日月湖**のような風景が広がっていたと思われる。古くは、和歌にも詠まれているくらい、情を誘う景観であったものと思われる。

**蒲生**：以前には蒲沼と呼称されていたようで、葦などが群生する**湿地**であったようで、有機物が多く含まれる土質が地下で確認されます。なお、字名には原、袋、沼、田、谷地、荒田、須賀、蓬田、稗田など、いわゆる災害地名が多かったことがわかります。

**岩切**：いかにも、石切場を思わせるが、確かに国分寺造営時の石材に用いられたという説もあるようですが、この付近は、砂岩や酸性凝灰岩で堅固なものは分布していないのですが・・・ 推測ですが、当時盛んであった塩釜詣のときに、この付近を遠望すると、山が両側に迫って見える感じで、切り割りのようなものに由来したのではないかと思います。

**日和山**：七北田川の河口（右岸）には、震災前には日本一低山（標高6.05m）という看板のある丘がありました。この山、実は近くの養魚場を掘削したときの土で盛り上げた築山です。

## 自然災害とは？

自然災害は、自然現象が原因で、さまざまわれわれの生活に被害を及ぼすものでありますが、その姿、時期、規模は多種多様です。“未経験”、“想定外”という言葉の出るゆえんでもあります。

例えば、土砂災害の誘因である豪雨は、水害を伴いながらも、いずれも台風が起因でした。災害を引き起こした土砂移動現象の規模は従来に大きく、これは豪雨が巨大化または集中停滞化していることによるものです。これまでの傾向とは異なって、新しいパターンが出現していることも大きな特徴となっています。

災害を多く、巨大化している要因には、われわれの生活環境の変化も無視できないのです。例えば、造成地における谷埋め盛土の不安定化、旧河川敷の盛土など、土石流堆積地域での造成など旧地形を思い出させるような行為が素因となっている例も少なくありません。

## どんな自然災害が起きるか

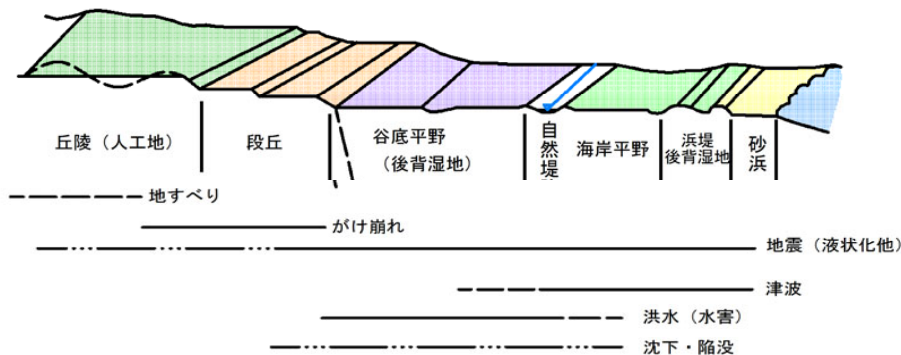
地表に姿を見せている地形は、長い間の地表の営みによって形成されたもので、まさに歴史的遺産であり、宮城野区内の地形を区分してみたものを下図に示しました。



地形区分	分布	特性
低地	海岸低地	海岸に沿った広域 浜堤、潟湖、後背地
	苦竹低地	苦竹～福田町 七北田川・広瀬川間にできた低湿地(泥炭地)
	七北田低地	七北田川流域 自然堤防、旧河道、後背地、三日月湖など
	震ノ目低地	蒲町付近 旧広瀬川の堆積面(一部湿地)
台地・丘陵	仙台市街地 榴ヶ岡から中心部一帯	河岸段丘
	七北田丘陵	鶴谷、燕沢など一帯 100m以下の低山で、著しい開析が進行。造成が展開されている。

①津波、②水害、③液状化、④がけくずれ、⑤地盤災害(地すべり、土石流、沈下、陥没)

地形や地質は、自然災害の素因として、極めて密接な関係にあります。地域知のひとつとして、把握しておくことは、極めて重要な防災のひとつになるものと思われまます。これに、今までの履歴などを重ねていくと、さらに発生の精度を高めることができます。



## 災害に強くなるには？

防災は、振り込め詐欺や子どもたちを守る地域安全など防犯と同じ心構えが必要です。つまり、可能な限り、他人や行政に頼る前に自分は自分で守る、自分のペースをもって対応することです。



## 被害にあわないために・・・

1. 経験は忘れないようにする。(伝える、書き残す)
2. どんなことが、どこに起きるのかを知る。
3. 災害への気づき、感じ方に敏感になる。
4. 自分が助かれれば、他の人を助けることができる。正しい考えで正しく行動をする。

↓  
危険なことを避けることができる=自助

## 災害に強くなるために

地域に関心を持つ	何を知るのか？	どのような方法で？
1. どのような危険があるか？ 2. 災害に強く関心を持つ	1. 歴史(災害の種類、いわれ、伝わっていること) 2. 地形や地質 3. 気象、河川 4. 土地のできかた	1. 野外での観察 2. 資料の整理 3. 聞き込み
考える ↓ 災害になりそうなきに行動できる。	知る、確認する ↓ 見えないものをみる。	情報収集 ↓ いかにせるものについて整理して、正確に伝える。

